

日本語におけるミラティブ性の表現について ——ミラティブのタ形の意味用法を中心に——

台湾大学 李禹錫

日本語には「あ、ここにあった！」のように、話者の驚きや思いがけないこと、いわばミラティブ性(mirativity)を動詞のタ形で示す表現がある。こうしたタ形の用法は「発見のタ形」(国広 1967)などと呼ばれるが、本稿は「発見」という用語の曖昧さを避けたいため、ミラティブ性を表すタ形を「ミラティブのタ形」と呼ぶ。従来の研究では、ミラティブのタ形は述語が状態的なものに限定されることが多い。しかし、実際の使用場面において、「バスが来た！」のように動作動詞のタ形でミラティブ性を表す表現も少なくない。こうした動作動詞のミラティブのタ形はさほど研究されず、そのメカニズムもはっきりされていないのである。ゆえに、本稿では動詞に用いられるミラティブのタ形についてテンス・アスペクト的な観点から再検討した。

まず、タ形のミラティブ性の特徴は話者の探索意識による事前の観察行為が必要であるため、本稿ではこれを前提として、ミラティブのタ形を述語が状態動詞である場合と動作動詞である場合に分けて分析してみた。

その分析結果として、状態動詞のミラティブのタ形は〈過去完成〉のタ形に由来することがわかった。話者はタ形を用いて恒常的な継続状態から一部の〈過去〉の状態を切り離して独立に叙述する。さらにその一部の過去状態の〈完成性〉によって事前観察行為の存在と話者の発見が暗示される。その「発見」の流れは、[探索意識による観察行為—過去状態の存在—状態の発見]であり、これは時系列に沿って順次的に叙述するのが特徴である。

一方、動作動詞のミラティブのタ形は〈現在パーフェクト〉のタ形に由来することがわかった。ある出来事における動作の開始か終了を設定時点の現在に引きつけることによって、その先行した出来事の効力に今気づいたというミラティブ性を表すことができる。その「発見」の流れは、[ある出来事の開始か終了—探索意識による観察行為—先行した出来事の効力の発見]であり、これは現在時点で先行した出来事を振り返ってみるのが特徴である。

以上、状態動詞と動作動詞は両方ともタ形でミラティブ性を表す機能を有するが、その時間性のメカニズムや「発見」の流れには相違があることは本稿の考察を通して明らかにできた。